



ひがしぐち たかし
東口 高士 さん (鮎田)

Profile

災害時、鮎田区長として鮎田自主防災会長と連携し、避難所の運営や地域の連絡などに尽力されました。

「試行錯誤しながらも「遊びの中に防災を」

当時は鮎田自主防災会長と2人3脚で活動しており、台風が来る前からデータを取っていました。浸水のスピードは早く、輪中堤を越えるデータが出てきたため、避難場所を鮎田の集会所から、高台にある大通寺と牛鼻神社に変更し、みなさんを避難させました。

当時は携帯が使えたため、ある程度の情報収集ができて、慌てることなく対応できたと思います。一方で、普段付き合っていない人がいると

つながりがない人がいると

連絡を取ることができず、孤立していたということもあったので、横のつながりの大切さに改めて気づかされました。

そのため、普段からの地区住民との関わりが大切だと思い、今ではすぐに情報共有ができるようにライングループを組み、地域の連絡網として活用しています。

現在では、紀伊半島大水害から10年が経ち、防災意識を高めるために、地区住民にどのように防災意識を植え付けるかが今後の課題です。そのためには、日ごろの積み重ねが重要で、鮎田地区では毎月、何かしらの防災訓練を行っています。

しかし、ただ防災訓練を行うだけでは、飽きや慣れが必ず来ます。そうならないためにも、ドローンなど新しいものを取り入れ、「遊びの中に防災を」という考えで、試行錯誤しながら防災訓練を開催しています。

みなさんには、自分の命は自分で守り、ほかの人をあてにしないという防災意識を持ってもらい、いざというときに行動してもらいたいと思います。



てらお くによし
寺尾 邦義 さん (大里)

Profile

災害時、避難所の管理人として、大里地区で避難所の運営・管理に尽力されました。

地域のつながりが防災・減災対策へと

台風第12号の影響で、9月2日に自主避難したいという人がいたため、大里多目的集会所施設に避難所を開設しました。その後も避難者は増え、水位が上昇を続けていたため、このままでは危険だと感じ、相野谷中学校の体育館に避難者を移動させました。最終的には、水が相野谷中学校のグラウンドの下まで来ていたので、移動する判断を取ってよかったです。

当時は振り返ると、避難してきた人がいつ避難し、いつ出

ていったのか記録を付けて役場に報告していたため、名簿を作成することが大変でした。また、避難した人だけでなく、自宅待機の人にも食糧の支給を行っていたため、その点には苦労しました。今でも災害時にいろいろな記録したノートは大切に持っています。

一方、避難してきた人の一番の悩みは、情報が入ってこないということでした。そこで情報共有の場として、体育館に避難してから5日目の朝にラジオ体操を始めました。そして、ラジオ体操が終わった後に、朝礼として一日の連絡事項を伝えるようになりました。そうしているとみんなも次第に集まり、不満も解消されていきました。最終的には、9月に開設した避難所を閉鎖する翌年の1月21日までの約4か月半、毎朝欠かさず、ラジオ体操と朝礼を行いました。大きな混乱もなく避難所の運営・管理ができたと思います。

今後、いつ起こるかかわからない災害に備えて、ともに地域の人を想い、地域のためにがんばりましょう。地域のつながりが防災・減災につながると思います。

つながりがない人がいると

被災体験の記憶

未曾有の被害をもたらした台風第12号。ここでは、4人の方に当時の記憶や教訓、今後についてなど、お話を伺いました。



ひしに たみ
聖谷 定三 さん (浅里)

Profile

災害時、浅里区長を務め、浅里地区で活動するボランティアの割り振りなど、復興に尽力されました。

ボランティアのみなさんに感謝です

連日降り続く雨により、水位の予測が難しく、いったん引いたと思った水が、いきなり水位を増して家に押し寄せてきたため、何も持たずに逃げのが精いっぱいでした。

水が引き、動ける状態になってから、浅里地区のみならずどこに逃げ、どこに避難したかを調べておく必要があると思います、聞けることを聞いて回りました。

その後、9月5〜6日にかけて、自衛隊のヘリコプターで浅里の住民全員が救助さ

つながりがない人がいると

連絡を取ることができず、孤立していたということもあったので、横のつながりの大切さに改めて気づかされました。

そのため、普段からの地区住民との関わりが大切だと思い、今ではすぐに情報共有ができるようにライングループを組み、地域の連絡網として活用しています。

現在では、紀伊半島大水害から10年が経ち、防災意識を高めるために、地区住民にどのように防災意識を植え付けるかが今後の課題です。そのためには、日ごろの積み重ねが重要で、鮎田地区では毎月、何かしらの防災訓練を行っています。

しかし、ただ防災訓練を行うだけでは、飽きや慣れが必ず来ます。そうならないためにも、ドローンなど新しいものを取り入れ、「遊びの中に防災を」という考えで、試行錯誤しながら防災訓練を開催しています。

みなさんには、自分の命は自分で守り、ほかの人をあてにしないという防災意識を持ってもらい、いざというときに行動してもらいたいと思います。



かなだ ようじ
金田 洋三 さん (成川)

Profile

災害時、成川飯盛地区自主防災会の会長を務め、避難所の運営や飯盛地区での活動に尽力されました。

後世に災害を語り継ぐことが大切

9月4日午前3時ごろ、防災無線が鳴り響き、石ノ前地区に避難指示が出されました。すぐさま身支度して飯盛多目的集会所へ向かうも、当時は、飯盛保育所が避難所として開設されていました。

その後も避難者が増え、何人かは、腰まで水に浸かりながら避難してきた人もおり、その日の避難者は15人になりました。

夜が明けると、河川の氾濫により、目の前の景色は見たこともない光景が広がっていたことを憶えています。飯盛地

つながりがない人がいると

連絡を取ることができず、孤立していたということもあったので、横のつながりの大切さに改めて気づかされました。

その後、9月5〜6日にかけて、自衛隊のヘリコプターで浅里の住民全員が救助さ

区では、130世帯のうち、約4割が浸水被害に遭いました。5日になり、避難所を保育所から飯盛多目的集会所に移し、避難者を飯盛地区自主防災会で支援しました。当時は、電気は使えましたが、断水していたため、大きく生活環境に影響しました。

7日に、避難所は開設され、避難者はまなびの郷に移動しました。そして、10日からは、役場や社協などの救援物資の配給から、浸水被害に遭ったお宅や高齢者、赤ちゃんがいるお宅など、各家庭に必要なものを選別し、宅配活動を行いました。

また、浸水被害に遭った家の片付けなどは大変でしたが、被災していない人が積極的に協力してくれたことは、とてもうれしかったです。改めて、横のつながりの重要性に気づかされました。

この災害の経験を後世に継承していくことが私たちの役割です。この日を忘れないためにも、災害を経験した人が積極的にその地域に住んでいる人、災害を知らない子どもたちに語り継いでください。その経験や教訓が後世への救いになることを願います。